

The Emergence of Evangelical Culture in the 18th-century Atlantic World

(18 世紀大西洋世界における
福音主義文化の醸成)

Shitsuyo Masui*

SUMMARY: This paper attempts to survey the emergence of the eighteenth-century Evangelical culture, focusing not just on the Eastern seaboard of North American colonies but on the Atlantic world as a whole. It deals with three separate but connected issues: German-Pietist missionary work in the Caribbean and in North America, the Evangelical consensus between Jonathan Edwards and George Whitefield, and the role of the Methodist publication network in the emergence of Black Atlantic literature. The three themes are sharply distinct yet intricately related. The Moravian missionaries worked closely with Whitefield in Georgia and strongly influenced John Wesley during their Atlantic voyage. Both Whitefield and Edwards met at least twice to share their insights and to exchange theological opinions over the religious revival afoot in the North American seaboard colonies. Both Phillis Wheatley and Olaudah Equiano contributed to the Evangelical culture as literary geniuses through the Methodist publishing network fostered by Whitefield and the Countess of Huntington. Only when we look at these three distinctive themes as interrelated events in the Atlantic world, will we be able to place such events as the First Great Awakening, the birth of the Black Church, and the emergence of the trans-Atlantic Evangelical publication network in historical perspective. The aim of this paper is to provide such a perspective on the birth of Evangelical Protestant culture in the eighteenth century, as a trans-Atlantic phenomenon that eventually fostered the predominant religious culture of the Atlantic world.

* 増井 志津代 Professor, Department of English Literature, Sophia University, Tokyo, Japan.

はじめに

18世紀は思想上では啓蒙主義の時代で、理性の時代が幕開けし、宗教の影響力が弱まったと説明されがちである。しかしながら、キリスト教史を振り返ると、この時代に敬虔主義 (Pietism)、福音主義リバイバル (Evangelical Revival) 等の信仰刷新運動が起き、アフリカ、カリブ諸島、北アメリカにおいてプロテスタント・キリスト教の世界宣教が開始する。¹ カトリック教会はプロテスタント宗教改革直後すでに、イエズス会を中心にアジア宣教を進行させていたが、プロテスタント世界宣教は、これより200年も遅れて始まる。その理由は、西ヨーロッパを動乱に陥れた三十年戦争 (1618~1648) 後、プロテスタント諸派はウェストファリア条約締結以降の地域内体制立て直しが急務で、域外宣教の余力は17世紀末頃まで生まれなかったためである。

18世紀も半ばになると、プロテスタントはヨーロッパ系以外の信仰者を獲得するようになる。例えば、9版を重ねたスレイヴ・ナラティヴの作者であるオラウダ・イクイアーノ (Oludah Equiano, c. 1745-1797) は、1766年、自由人となり西インド諸島からロンドンに到達した際、まず求めたのは魂の「救済」(salvation) と所属する「教会の交わり」(church-fellowship) であったことを次のように記している。「私は大いに喜び、ロンドンに導いてくださった主に感謝した。そこで私は自身の救済のために努力し、天国に入るための資格を獲得したいと決意した。無知と罪により盲目となっていた心の状態であったので」、² と『興味深い物語』10章の冒頭で述べている。回心体験ナラティヴの体裁となっているこの章では、求道が続けていたイクイアーノがメソジストのチャペルにおける愛餐会 (a love feast) への参加をきっかけとし、この交わりに自分の場所を見出したことが告白されている。「私はその同じチャペルで信仰試問を受け、教会の交わりへと受け入れられた。我が魂は歓喜し、あらゆる憐れみを与えてくださった神を心の中で賛美した」。³ 10章全体が17世紀のピューリタン回心体験ナラティヴに似た救済体験談の形を取っており、ジョン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703-1758) やジョン・ウェスレー (John Wesley, 1703-1791) の回心体験記録とも類似している。⁴ 本稿では、イクイアーノの回心を生んだ、大西洋世界におけるプロテスタンティズムの展開に注目する。この時代、西インド諸島や北アメリカに伝わったキリスト教は、人種・文化・環境による混淆を

経ることでさらに変容する。

ルターの宗教改革後、16世紀半ばから17世紀にかけて、ヨーロッパではプロテスタント正統主義がほぼ確立する。ルターやカルヴァンの神学が次世代の継承者達により体系化、スコラ化されていったのである。例えば、ルター派ではアウグスブルク信仰告白 (The Augsburg Confession, 1530)、改革派ではハイデルベルク信条 (The Heidelberg Catechism, 1563) やウェストミンスター信仰告白 (The Westminster Confession, 1646) が成立し、プロテスタント各教派はそれぞれの特色を提示した。こうして、17世紀に信仰告白や教義問答により整備され成立した正統主義はヨーロッパのプロテスタント諸教会に安定をもたらしたものの、教会会議や信条で体系化された信仰は宗教改革時のエネルギーを失い、「死せる正統主義」(dead orthodoxy) との批判を免れない状況に陥る。このため、18世紀には理性的な体系化に対する反動が起きたと考えられる。神学者の佐藤敏夫は、「敬虔主義も啓蒙主義神学も、自由主義神学も信仰復興運動も、結局17世紀に成立した正統主義神学に対する反立、あるいは復帰というダイナミクスにおいて生まれてきているのであり、これを念頭におかず近代キリスト教思想の動的な発展の意味を理解することはできない」⁵と指摘する。すなわち、正統主義成立期のスコラの理性中心主義への反動として、18世紀の信仰復興運動 (リバイバル) や敬虔主義といった「心の信仰」(heart religion)⁶が誕生したと捉えられるのである。

18世紀における正統主義への反動は極めて強力なエネルギーを伴い、これによりプロテスタントの世界展開に向けた大きなうねりが生み出された。北アメリカでは18世紀、第一次大覚醒運動 (The First Great Awakening, 1730~1740年代) と呼ばれる信仰リバイバルが起きた。ドイツではハレを中心としたルター派敬虔主義が新しい敬虔 (piety) の形を提示し、プロテスタント世界宣教が本格的に開始する。英国ではジョン・ウェスレー、チャールズ・ウェスレー (Charles Wesley, 1707-1788) 兄弟の主導により、オクスフォード大学においてメソジスト運動が始まる。

18世紀はまた、帝国成長の時代、大西洋における奴隷貿易の全盛期でもある。個人の力を凌駕する大きな政治経済の動きが進行する中、啓蒙主義の影響は個人の理性や感情への注目を促し、近代的な自我の確立が目指されていく。世界宣教に積極的だったキリスト教にはプロテスタント、カトリック共に、類似した特徴がある。それは「心の信仰」と呼ばれるように、理性よりも個人の信仰体験や感情を重視する

信仰表現を重視したことである。この特徴は、17世紀ピューリタン運動にすでに見られ、さらに遡れば、アヴィラの聖テレサ（St. Teresa of Avila, 1515-1582）や十字架の聖ヨハネ（St. John of the Cross, 1542-1591）の体験主義的信仰実践にも確認されるが、ルター派における敬虔主義運動にもこれと似た特徴が現れた。ドイツ敬虔主義では、イングランドやニューイングランドのピューリタニズムと同じく、個人の福音的回心体験が強調される。近代的自我の発生が目される時代、敬虔主義はその行き過ぎを制御抑制し伝統的なキリスト教信仰に回帰させたという解釈もありうるが、その一部は、制御のできない「熱狂主義」（enthusiasm）へと進み、ラディカルな信仰表現へと向かった。こうした両義性を持つ新しい敬虔が、18世紀のアフリカ、カリブ海、北アメリカにもたらされたのである。

本稿では、18世紀のプロテスタント世界進出を、環大西洋におけるネットワークの発展に位置付けながら、大きく三つのテーマに分けて、その特徴を解明する。最初に「ドイツ敬虔派とカリブ海・北アメリカ宣教」を取り上げる。次に「エドワーズとホイットフィールドの福音主義コンセンサス」とし、大覚醒期の北アメリカに注目する。最後に、「メソジスト出版活動とブラック・アトランティック」をテーマに、アフリカ系アメリカ文学の黎明期とキリスト教の関係に焦点を当てる。以上3テーマから、18世紀大西洋世界システムにおけるキリスト教の思想史の見取り図を示し、初期プロテスタント宣教とそれによりもたらされた18世紀キリスト教の特徴を解明したい。

1. ドイツ敬虔派とカリブ海・北アメリカ宣教

歴史家バーナード・ベイリンは、大西洋システムはネットワークにより展開したため、国民国家や帝国の枠に収まりきらないと主張するが、⁷それは宗教運動の展開においても言える。敬虔主義や第一次大覚醒運動は環大西洋的な展開を見たため、一つの国あるいは帝国には収まらない宗教運動となった。ことに、正統主義の枠に収まりきらなかったヨーロッパのキリスト教諸派は、西インド諸島や北アメリカ大陸に宣教の足場を求めた。典型的な例は、プロテスタントの中で最も積極的な海外宣教活動を行なったドイツ敬虔派のモラヴィア兄弟団で、その活動は超国家的規模となり、大西洋の各地を結ぶネットワークによる展開を遂げる。

1) ハレの敬虔主義

ドイツ、ハレで始まった敬虔主義運動はフィリップ・ヤコブ・シュペナー (Philipp Jacob Spener, 1635-1705) に指導されたルター派の信仰運動である。シュペナーは 1670 年、「敬虔の集い」(*collegia pietatis*; *pious groups*) という、小グループによる信仰実践活動を開始した。1675 年に出版した『敬虔な望み』(*Pia Desideria*) は、敬虔主義のプログラムを記した書物で、そこには、ルターの教えに沿った六つの実践的な提言が示されている。第一に聖書に親しむこと、第二に万人祭司の実践 (一般信徒による)、第三はキリスト教徒にふさわしい生活の強調、第四は信仰についての積極的な討論の奨励、第五に神学教育改革、第六に信仰に結びつく説教の推進と続く。1690 年代になるとオーガスト・ヘルマン・フランケ (August Hermann Francke, 1663-1727) がシュペナーの協力者となり、ハレ大学を中心に、さらに賛同者を獲得し、やがてハレは、神学教育の推進と海外宣教を実践する敬虔主義の中心地となる。⁸ ハレ敬虔主義運動の特徴は、特別な教義を唱えて教派を作るのではなく、あくまでもルター派内部における改革実践運動に止まったことである。敬虔主義の活動はドイツ以外でも同様に進められ、ヨーロッパ各地でルター派だけでなく、改革派、英国教会などに着々と広まっていく。また、フランケが着手した孤児院、薬局、教育施設の建設による社会改良プログラムは、宣教地でも実践され、やがて福音主義運動の核となっていった。

フランケに関しては、ニューイングランド・ピューリタン正統主義を担ったコットン・マザー (Cotton Mather, 1663-1728) と文通をしていた記録がある。マザーの著作『善行録』(*Bonifacius*, 1710) で提言されているピューリタンの教会改革プログラムは、敬虔派の実践を採用したものと言われる。マザーの『善行録』は、ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) による社会活動、さらには 19 世紀第二次大覚醒後のヴォランティア・アソシエーション (自発結社) 設立に影響を与えたのであるが、こうした展開を見ると、アメリカにおける敬虔主義の社会实践面での影響の大きさを測ることができる。⁹

イングランドでは、オクスフォード大学の学生であったジョン・ウェスレー (John Wesley, 1703-1791) とチャールズ・ウェスレー (Charles Wesley, 1707-1788) が主導した「ホーリー・クラブ」の活動が 1720 年代に開始する。イングランドにはピューリタン運動を始めとする独自の霊的伝統があるものの、オクスフォード・メソジスト運動は敬虔主

義の影響下にある活動であった。初期メソジストの一人ジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714-1770) は、植民地建設初期のジョージアに渡り、1740年代に北アメリカの大覚醒運動の中心的人物となる。彼の用いた野外説教 (field preaching) はいたるところで多くの群衆を集め、植民地のリバイバルを牽引していった。

2) モラヴィア派の海外宣教

敬虔派の海外宣教で最も注目されるのは、シュペナーやフランケの影響を受けながら敬虔主義的環境で育ったドイツ人貴族、ニコラス・ルドヴィグ・フォン・ツィンツェンドルフ卿 (Nikolaus Ludwig von Zinzendorf, 1700-1760) の活動である。メソジストのウェスレーとホイットフィールドは、ジョージア植民地やペンシルヴァニアでモラヴィア派と接点を持ち、それぞれのジャーナルでその活動に言及している。特にウェスレーはモラヴィア派の霊的な中心であるドイツのヘルムフトを直接訪問するほど一時は傾倒し、ドイツ敬虔派の強い影響を受けた。

モラヴィア派はツィンツェンドルフ卿のリーダーシップによりカリブ海とペンシルヴァニア植民地を中心とした宣教を行った。ジョン・F・センスバックの研究によると、モラヴィア派宣教師は1730年代からデンマーク領セント・トーマス島に渡りアフリカ系の人々への伝道を行っていた。宣教活動はアフリカ系の人々に受け入れられたものの、白人の主人たちに嫌がられ、集会に参加するアフリカ人に対する暴力沙汰もしばしば起きたという。

センスバックはアメリカ黒人プロテスタント教会 (Black Protestant Church) の起源を、18世紀初頭のモラヴィア派の影響を受けた西インド諸島のアフリカ系グループに見出す。セント・トーマス、セント・ジョン、セント・クロイ島において、モラヴィア派の影響下、アメリカにおけるアフリカ系プロテスタント最初のディアスポラが形成されたとするのである。モラヴィア派の宣教活動により、西インド諸島だけで60,000人以上のアフリカ系奴隷のプロテスタント改宗者が生まれたという。こうして撒かれた種は19世紀アンテベラム期、カリブ海と北アメリカにおいて「奴隷の宗教」(Slave religion)、つまりアルバート・J・ラボトーが「見えざる教会」(“the Invisible Institution”) ¹⁰ と呼び分析したところのアメリカ南部の奴隷キリスト教共同体へと発展したのだと主張する。¹¹

こうしたセンスバックの主張に対しては極端な解釈との批判もあ

り、裏付けとなる資料が十分あるとは言えない。しかし、西インド諸島と北アメリカ植民地が奴隷貿易や物資の輸送において緊密に結ばれていたのは事実である。さらに、モラヴィア派宣教は西インド諸島からジョージア、ペンシルヴァニアなどの植民地にも展開していったので、その関連性は否定できない。

センスバックの最大の貢献は、モラヴィア派のアフリカ系元奴隷で、やがて宣教師として活躍したレベッカ・プロッテン (Rebecca Protten, 1718-1780) の生涯を明らかにしたことである。セント・トーマス島でアフリカ系奴隷とヨーロッパ系白人との間に生まれたムラトールのレベッカは、1736年、ドイツ人宣教師フリードリッヒ・マーティン (Friedrich Martin) との出会いを通してモラヴィア派信徒となる。やがてアフリカに宣教師として赴いたレベッカは、特にアフリカの女性への伝道を得意とし、白人宣教師よりも効果的な伝道を行なったという。¹²

敬虔主義の主要グループであるモラヴィア派は、元来、ボヘミヤのヤン・フス (Jan Hus, 1369-1415) による宗教改革の影響を受けたスラヴ系民族である。定住地を追われ、ドイツ国境に近いサクソニーのツィンツェンドルフ卿の領土にたどり着いたところを保護され、東方教会の神秘主義的伝統も受け継いだ、プロテスタントの中でも特殊な民族グループである。スラヴ (Slav) はスレイヴ (slave) の語源とも言われるが、彼らは西インド諸島やアメリカの宣教地ではアフリカ系奴隷や先住民の中に入り、熱心な伝道を行った。モラヴィア派はルター派に属しているとはいえ、その正統主義をそのまま受け入れていたわけではない。彼らをサクソニーで保護したツィンツェンドルフ卿は、モラヴィアの人々をルター派に入れるために大変な努力を重ねた。民族や国家間の争いの中さすらいの民となったモラヴィア兄弟団の人々は、奴隷とされ自分の意思とは異なる場所を連れまわされたアフリカ系の人々と肌の色を超えて共鳴するものを持っていたのかもしれない。

3) モラヴィア派のネットワーク形成

モラヴィア派は基本的に三つの形態をとる独特なネットワークを持っていた。第一に活動の中心となる共同体を形成する。ヘルンフートを含むドイツの拠点三箇所とアメリカの三共同体は、モラヴィア兄弟団の霊性の中心を担っていた。第二に、様々な地域に分散したグループはディアスポラの共同体を作る。移住地域では独自の教会建設は行わず、地域の国教会など既製教会の活動に参加した。例えば、イング

ランドに行けば英国教会、オランダならば改革派教会といった公定教会に属して自分たちの教派教会を作らない方針を取った。第三は最も重要視された宣教師たちの集団で、これがモラヴィア派の霊的な核となった。宣教師が最も重要とみなされることから、モラヴィア派の目標が伝道活動にあったことがわかる。ツィンツェンドルフ卿自身も宣教師として海外に赴き、ヨーロッパ滞在中は領有するヘルンフォートではなくロンドンのチェルシー地区に居を構えていた。宣教師はどの共同体にも属さない流動性があるのが特徴であった。教会堂を建設し、そこを拠点とした共同体建設を行う他の移民グループと比較すると大変ユニークな特徴を有していた。

宗教的寛容が採用されたペンシルヴァニアには植民地建設初期より、様々なグループが入植していたが、モラヴィア兄弟団をはじめとするドイツ系宣教師もここに重点的に移住した。ペンシルヴァニア内陸部にベツレヘム共同体を建設し、そこを訪問したツィンツェンドルフ卿は、ルター派が正統主義の牧師としてドイツから公式にハインリヒ・メルキオール・ミュレンバーク (Heinrich Melchior Mühlberg, 1611-1787) を派遣するまで、モラヴィア派だけでなく、ペンシルヴァニアのルター派移民全体のリーダーシップを一時的に掌握した。ペンシルヴァニア滞在中、ツィンツェンドルフ卿はベンジャミン・フランクリンとも交流し、モラヴィア派関連の信仰書や賛美歌の印刷出版を依頼している。さらには自ら率先してイロクォイ族への宣教に赴き、インディアンへの積極的な宣教活動を展開させた。

敬虔派は宣教活動を主眼とし、教派教会樹立は目的とはならなかった。しかし、個人の敬虔と小グループによる信仰実践の方法は既存の教派に取り入れられると共に、18世紀の第一次大覚醒、さらには19世紀西部開拓地における第二次大覚醒運動において、その特徴を継承する新興教派を誕生させることになる。

4) メソジストの神学的分裂——カルヴァン主義とアルミニウス主義

ウェスレー兄弟により開始されたメソジスト運動の協力者であったホイットフィールドは、カルヴァン主義的傾向を次第に明確にし、やがてアルミニウス主義的傾向を明確にしていくジョン・ウェスレーに反発する。オクスフォード大学時代からメソジスト運動を牽引した二人は、1739年頃から神学的な相違により次第に袂を分かたつ。これについては、ホイットフィールドがウェスレーに宛てた書簡が残っている。1740年12月24日付の手紙の中で、ホイットフィールドは、次

第にアルミニウス主義へと向かうウェスレーを強く批判し、自身はカルヴァン主義の立場を堅持すると告げている。

親愛なる友よ、イエス・キリストにあると言いながら、選定の教義を否定することによりどれほど神を冒瀆しているか考えて欲しい。貴方は単に、救済は神の「自由恩恵」(*free-grace*)ではなく、人の「自由意志」(*free-will*)によるとする。もしそうであるなら、イエス・キリストが、ご自身の死の結果を人の魂の永遠の救済のうちに見出し満足されるということはありません。そうならば、私たちの説教は無駄であり、人々をイエスへの信仰に招く努力の全てが無駄となる。¹³

このように、ホイットフィールドは「選定の教義」を強調して、自身のカルヴァン主義的立場を明確にした。これについてジョージ・ハモンドは、ホイットフィールドが1739年の2回目のアメリカ渡航中、カルヴァン主義神学を集中的に学んだことがウェスレーに対する激しいアルミニウス主義批判につながったとする。¹⁴ 1740年代以降になると、ホイットフィールドはエドワーズを始めとするニューイングランド・ピューリタンとの緊密な交流を開始していった。

大学時代、メソジスト運動に導いてくれたジョン・ウェスレーがドイツ敬虔派との交流を経て、アルミニウス主義的傾向を強くしていくのに対して、ホイットフィールドはニューイングランド・ピューリタンに近いカルヴィニズムの立場を明確にしていった。こうして18世紀半ば、メソジストはホイットフィールドのカルヴァン主義とウェスレーのアルミニウス主義に分裂する。

ジョン・ウェスレーのアルミニウス主義には、ドイツ敬虔派の影響が大きい。1736年、ウェスレーはジョージア渡航の船上で、26人のモラヴィア派宣教師と遭遇した。嵐に怯えるウェスレー等とは異なり、「ドイツ人たちは顔を上げ、途切れることなく静かに歌を口ずさんでいた」¹⁵と、ウェスレーはジャーナルに記している。やがて、ジョージアにおける植民生活に挫折し、英国に帰還した後も、ウェスレーはモラヴィア派の指導者でロンドンに滞在していたピーター・ボーラー(Peter Bohler, 1712-1775)との交流を続けた。1738年5月24日のジャーナルには、ウェスレーの回心体験の記録とされる箇所がある。この日に出席した集会で、ウェスレーはルターの『ローマ書注解』の序文が講読されるのを聴き「心が奇妙に暖くなる感じがした」¹⁶と記して

いる。ルターの著作を講読していたのはモラヴィア派指導者の一人、ウィリアム・ホランド (William Holland) で、ウェスレーの回心体験にモラヴィア派が深く関与したことがわかる。同年8月、ウェスレーはドイツに旅し、ヘルンフォートを訪問する。ボーラーやモラヴィア派との関係はその後、次第に途絶えたものの、その後のウェスレーのメソジズムにはモラヴィア派のアルミニウス主義が大きな影響を残した。

他方のホイットフィールドは、ニューイングランド訪問を要請され、1740~1741年の宣教旅行後も繰り返し訪れた。1770年に客死したのもマサチューセッツのニューベリーポート滞在中である。ウェスレーとホイットフィールドの溝は、二人が置かれた環境により次第に広がっていったのかもしれない。エドワーズやニューイングランド会衆派、中部植民地スコットランド長老派のテネント兄弟等と交流したホイットフィールドは、カルヴァン主義的傾向を保持し、モラヴィア派の影響をより強く受け、個人の敬虔に力点を置くウェスレーはアルミニウス主義的傾向を強めていった。

ドイツ敬虔主義は、教会形成を主目的とせず、個人の回心、敬虔と霊性の成長を重視する。こうした強調点は、奴隷制度の中で抑圧を体験するアフリカ系の人々や、英国教会の正式な按手を受けたウェスレーのような聖職者に、人種や教派の垣根を超えて影響を与えることになったのである。

2. エドワーズとホイットフィールドの福音主義コンセンサス

宗教史家のジョン・バトラーは、アンテベラム期アメリカの宗教的状况を「スピリチュアル・ホットハウス」(spiritual hothouse)と呼んだ。¹⁷ 伝統的なキリスト教だけでなく、魔術や疑似科学、ブードゥーの影響等がせめぎ合う独立革命直後のアメリカ合衆国に適した表現であるが、同時に、プロテスタント各教派がアメリカにおいて、ヨーロッパ的な正統主義による統制に苦勞していたことも推察される。モラヴィア派をはじめとする敬虔主義グループによる積極的な宣教活動、さらに第一次大覚醒運動が引き起こした熱狂主義により、正統主義的統一は困難な状況にあった。植民地時代の終わり頃、第一次大覚醒運動を牽引し、この時代を代表する宗教指導者となったジョナサン・エドワーズとジョージ・ホイットフィールドはこのような混沌状況にどのよう

に対応したのだろうか。

第一次大覚醒運動は、アメリカ史において18世紀の最も主要な宗教的運動と評価される。リバイバルに伴う感情的な興奮や喧騒は、しばしば熱狂主義として、特にハーヴァード大学を中心とする会衆派牧師による批判の対象となった。¹⁸しかし、第一次大覚醒は、結局のところ、かなり統率された運動となる。その理由の第一は、この運動がイエール大学という穏健な会衆派の高等教育機関を拠点として獲得したこと、さらにはスコットランド系長老派のリバイバリストによりプリンストン大学創立がなされたためである。極端な熱狂主義は、やがて両大学で神学的な訓練を受けた牧師達の主導により抑制され、正統主義からの逸脱を免れる。第二に、この運動は、ニューイングランド会衆派のジョナサン・エドワーズと英国教会で正式な按手を受けた教職者のジョージ・ホイットフィールドにより主導された運動であったからである。エドワーズはイエール大学、ホイットフィールドはオクスフォード大学で訓練を受けた、大西洋兩岸の英語圏プロテスタントを代表する正統主義牧師であった。二人は、教派は異なるものの、正統主義神学について明確な理解と知識とを持っていた。この両者はまた、接触を重ねる中、協力関係を結びながら福音主義的コンセンサスをはかっていったと思われる。

1) ジョナサン・エドワーズとピューリタンのリバイバル

エドワーズが牧師を務めたノーサンプトン教会は、彼の祖父ソロモン・ストダード (Solomon Stoddard, 1643-1729) の時代から「魂の収穫」と呼ばれるリバイバルを経験していた。エドワーズが正牧師となつてから、特に1734~1735年にかけて特別なリバイバルが起きる。ポストン会衆派のリーダー的立場にあった牧師ベンジャミン・コールマン (Benjamin Colman, 1673-1747) は、直ちに報告書をまとめることを要請する。これに応じて、『神の驚くべき御業についての忠実な報告』(*A Faithful Narrative of the Surprising Work of God*, 1737) が著され、ロンドンとエジンバラで出版されるや、大西洋の兩岸で広く読まれることになった。

エドワーズは、「最も愚かでだらしなかつた人たち、生命の源である信仰体験を軽んじて、それを公言していた人たちが皆揃って大覚醒の対象となつたのです」¹⁹とその様子について語り、ノーサンプトンの住人の信仰上の変化と、特に共同体の若者たちに顕著に見られた倫理的な変貌とを細かく報告した。イングランドのノンコンフォーミス

ト、スコットランドの長老派、そしてメソジストのジョン・ウェスレーにも、この報告は影響を与えた。エドワーズの報告は、信仰復興がどのように起きるのかを伝授する、いわば福音主義のリバイバル・マニュアルとなったのである。しかしノーサンプトンでは、この信仰復興後、信仰的低迷期が続く。こうした状況の中、1740年、新たなリバイバルの波を行く先々で起こしていたジョージ・ホイットフィールドがボストンやノーサンプトンにあるニューイングランド会衆派諸教会を訪れる。

2) ジョージ・ホイットフィールド——メソジストのリバイバル

オクスフォード大学の学生時代ジョン・ウェスレー、チャールズ・ウェスレーに誘われ初期メソジスト運動の担い手となったジョージ・ホイットフィールドは、ジョン・ウェスレーに請われて植民地建設初期のジョージアに渡り、1740年代に北アメリカの大覚醒運動の中心となった。野外説教により各地で多くの群衆を集め、植民地の信仰復興を牽引する。

ベンジャミン・フランクリンは、ホイットフィールドがフィラデルフィアを二度目に訪問した時の様子を次のように述べている。

1739年に、イングランドから彼の地で巡回説教者として名を馳せたホイットフィールド牧師がやってきた。当初、この町の教会は説教を許可したのだが、牧師等が彼を嫌って講壇を貸すことを拒んだため、野外での説教をせざるを得なくなった。あらゆるセクトや教派から大勢がその説教を聞きにきたので、その数は膨大で、牧師が聴衆に与える大変な影響は、そこに居合わせた私にも想像できた。²⁰

フランクリンの報告から、まずフィラデルフィアにある英国教会の牧師たちがホイットフィールドの活動を嫌がったこと、それにも拘らず彼の人気は高く、教派を超えて様々な人々が説教を聞くために集まったことがわかる。自身の所属教派である英国教会牧師からは批判されたものの、ホイットフィールドはあらゆる場所で超教派的人気を獲得していく。

ホイットフィールドの人気は、彼の説教を直接聞いた人々だけでなく、フィラデルフィアを中心とした出版産業に助けられ、さらに広範

に及ぶことになる。ホイットフィールドは自身の『ジャーナル』の中で、フランクリン等フィラデルフィアの出版業者が彼の説教と『ジャーナル』をこぞって印刷出版したことを記している。

ニューヨークでの成功をもたらして下さった神に栄光あれ！この地 [フィラデルフィア] においても神は確かに働いておられる。出版業者の一人の話によると、私の説教とジャーナルの購読申し込みが 200 件以上取れたとのことだ。また別の出版業者によると、在庫を持ってさえいれば説教なら 1,000 部は売れただろうとのことだ。そこで、即興説教を 2 本、出版に回すために渡した。(1739 年 8 月 24 日)²¹

ホイットフィールドの『ジャーナル』や説教の出版を請け負っていたこの二人の出版業者の一人がフランクリンである。第一線の出版業者が商機を狙えるくらい、当時の植民地におけるホイットフィールドの民衆的人気は高かった。

ホイットフィールドは当初ジョン・ウェスレーの要請を受けて新大陸ジョージア植民地に向かった。植民地で開拓民に遺棄された子供達を保護する孤児院を建設・運営することが生涯を通じての事業で、大規模な宣教活動は孤児院建設のための資金集めが目的であった。

英領植民地の主要都市を巡ったホイットフィールドは、フィラデルフィアを複数回訪れている。ホイットフィールドはフランクリンにも回心を勧めたが、彼はそれを拒絶し、それにも拘らず二人の友好関係は長く続く。ホイットフィールドの交流が教派を超えたものであったことについては、『フランクリン自伝』(*The Autobiography*) 中、次の記録がある。

．．． イングランドからボストンに到着して、ホイットフィールド師はすぐにフィラデルフィアを訪問する予定であるが宿泊先が決まっていないと連絡してきた。いつも親切に宿泊場所を提供してくれていたベネゼット氏がジャーマンタウンに引っ越したためだとのことだ。²²

これに対してフランクリンは、いつでも自分の家で歓迎するので滞在してもらいたい旨、返信したと書いている。この引用中に登場するジョン・ステファン・ベネゼット (John Stephen Benezet) はペンシルヴァ

ニアのモラヴィア派主要人物の一人である。元ユグノーで、フィラデルフィアでクエイカーになったベネゼットは1743年にジャーマンタウンへ引っ越し、モラヴィア派に入会し、ベツレヘム共同体で最初の会計係を務めた。英国教会の牧師たちに受け入れられなかったホイットフィールドは、長老派教会の会員フランクリンや、モラヴィア派のベネゼットと超教派的な交流をしていたことがわかる。

3) 福音主義コンセンサス

ここで、エドワーズとホイットフィールドの交流に注目しておきたい。ホイットフィールドはノーサンプトンに住むエドワーズを少なくとも2回訪問している。1740年の訪問時は、特にノーサンプトンの若者たちに変化が見られたことをエドワーズは日誌に記している。ボストンに招かれたホイットフィールドはニューイングランドの他の地域をも訪問し、1740年代のリバイバルが起きる。しかし、この時のホイットフィールドの影響は一時的なものだったとの結論をエドワーズ自身が出したため、これまでの研究ではエドワーズのホイットフィールド評価はそれほど高いものではなかったとされてきた。しかし、エドワーズ研究者のケネス・ミンケマは、二人の協力関係が最初の出会い以降も継続したことに注目する。

大覚醒期ニューイングランドの会衆派の牧師たちの間ではリバイバルに伴う熱狂主義を巡って意見の食い違いが生じていた。エドワーズ自身は『宗教的感情論』(*A Treatise Concerning Religious Affections*, 1746)を著すことで、この問題に応答した。熱狂主義に関する批判はホイットフィールドにも向けられ、特にハーヴァード大学関係者による批判が強まる。ニューイングランドでは、リバイバルにことさら熱心なイエール大学出身の会衆派牧師ジェイムス・ダベンポート (James Davenport, 1716-1757) が示す奇矯な行動により、さらに批判が高まっていた。ダベンポートに影響を与えたホイットフィールドはニューイングランド会衆派から敬遠されたとの判断をピューリタン研究の大家ペリー・ミラーは下したものの、ミンケマはこれを修正し、エドワーズとホイットフィールドの交友が継続的なものであったことを指摘する。

ミンケマによると、エドワーズに対するホイットフィールドの敬意は、その妻であるサラ・ピアポント・エドワーズ (Sarah Pierrepont Edwards, 1710-1758) と築いたエドワーズ家に対するものであったとい

う。1740年の訪問について、ホイットフィールドは次のように『ジャーナル』に記している。

エドワーズ牧師の家を訪れて、大変に満たされた。これまで会ったこともないほど素晴らしい夫婦。子供達は絹やサテンではなく、簡素な身なりで、あらゆる面で、キリスト教徒らしい質素さの見本と言って良いだろう。エドワーズ夫人は柔和で温和な気質の持ち主。信仰について様々なことをしっかりと語る、夫にとって素晴らしい助け手である。私はこの数ヶ月ほど神に祈っていることに関する思いを新たにさせられた。つまり、神が私のもとにアブラハムの娘を一人、私の妻となるべく送ってくださるよう。²³

英国帰還後ホイットフィールドは結婚し、1745年にノーサンプトンに再訪した際には妻のエリザベスを伴った。結婚後のホイットフィールドはかなり穏健な人物となっており、エドワーズとの間で救済の確信や恩恵の働きなどの理解の多くを共有したとミンケマは判断する。²⁴ 大西洋を行き来するホイットフィールドの結婚生活は、しかしながら、エドワーズ家のような家族主義には向かわなかったと思われるのであるが、いずれにせよ、この再訪は、二人の交流の継続性を示唆している。

前述したように、1730年代の最初のリバイバルの頃から、エドワーズが目指したのは、半途契約に止まったまま、素行の悪いノーサンプトンの若者たちが回心を表明し、「契約の子」にふさわしい信仰継承者となり、キリスト教倫理に基づいた共同体形成を継続することであった。ピューリタンの信仰継承において、信仰者を育てる核となるのは家庭であり、ノーサンプトン教会正牧師としてエドワーズが目指したのはクリスチャン・ホームを基盤とした共同体樹立である。独立革命後の建国期の共和国主義に引き継がれていく良きクリスチャン・ホーム建設の理想はピューリタンのルーツを持つが、第一次大覚醒期に再生されたのである。個人を主体にした場合は熱狂主義的傾向に向かう可能性を持つ信仰復興は、家族という単位に取り込むことで緩和され、共同体にとって有用なものとなる。こうして、共同体にとって有益で社会性を伴う穏健な福音主義路線が、英国教会教職のホイットフィールドと会衆派牧師のエドワーズの間で共有された可能性は高いと思われる。

3. メソジスト出版活動とブラック・アトランティック

ホイットフィールドは、新大陸ではフランクリンをはじめとする出版業者と共に盛んに出版メディアを利用してリバイバルの宣伝を行ったが、環大西洋におけるメソジストの出版活動は、賛美歌や説教、信仰を助け、伝道を補助するための書物の出版へと進展する。ジョナサン・エドワーズが出版した『忠実な報告』では、回心者が次々と紹介され、本書は英語圏だけでなくヨーロッパ言語にも翻訳され、大西洋兩岸で受け入れられる信仰的な読み物の一つのモデルを提供した。ホイットフィールドやウェスレーを中心としたメソジストの出版物は、牧師や宣教師等、指導者層による報告だけではなく、宣教の対象とされたインディアンやアフリカ系の人々による回心体験の記録を新たな出版ジャンルとして紹介していくことになった。

メソジストの出版活動における有力な資金提供者の一人で、ホイットフィールドの支援者となったのがイングランド貴族ハンティンドン伯爵夫人セリーナ・ヘイスティングス (Selina Hastings, Countess of Huntingdon, 1707-1791) である。夫人は、ホイットフィールドがウェスレーと決裂した後も支援を続け、カルヴァン主義メソジストの立場を自らも表明した。さらに、ホイットフィールドの死後はジョージア植民地の孤児院ベテスタダの管理を引き受け、その経営に携わる。

ニューイングランドで病没したホイットフィールドの死を悼むエレジーを書いたフィリス・ホイートレー (Phillis Wheatley, 1753-1784) の詩集『信仰と道徳、様々な主題に関する詩集』(*Poems on Various Subjects, Religious and Moral*, 1773) のロンドンにおける出版は、ハンティンドン伯爵夫人の援助により可能となった。「1770年、ジョージ・ホイットフィールド牧師の死に寄せて」(“On the Death of the Rev. Mr. George Whitefield, 1770”) の中で、ホイートレーは、「偉大な伯爵夫人、我らアメリカ人はあなたの恩名に敬意を抱き、深い悲しみを分かち合う。ニューイングランドは深く悲しみ、孤児達は嘆く。彼らにとり父親以上であったお方の帰還はもはやないのだから」²⁵ と、伯爵夫人に呼びかけている。このエレジーに関しては、様々な印刷版が残っており、植民地におけるホイットフィールドの人気の高さを示すと共に、黒人奴隷少女の書いた詩が多く注目を獲得したことが窺える。

フィリス・ホイートレーはホイットフィールドの宣教活動を支援したボストンのオールドサウス教会 (第三教会) の会員で、エレジーの出版によりたちまち有名人となる。商人階級の信者を中心とした福音

主義的なオールドサウス教会は、フィリスの主人であるホイートレー一族の所属教会ではない。フィリス・ホイートレー伝を書いたヴィンセント・カレッタによると、フィリスはオールドサウスに自ら出向き、洗礼を受けたのだという。²⁶

ハンティンドン伯爵夫人のアフリカ系に対する出版援助には、複数のスレイヴ・ナラティヴが含まれる。新大陸最初のスレイヴ・ナラティヴとされるウカウソウ・グロニオソウ (James Albert Ukawsaw Gronniosaw c.1710-1775) のナラティヴ出版 (1772 年) に伯爵夫人が関わったことは、グロニオソウ自身が献呈文の中で述べている。²⁷ グロニオソウは幾人かの主人に売られた後、ニュージャージーで覚醒運動を牽引したオランダ改革派牧師セオドア・フレリングハイゼン (Theodore Jacob Frelinghuyzen, c.1691-c.1747) の所有奴隷となり回心体験をもつ。グロニオソウのナラティヴは、スレイヴ・ナラティヴと回心体験ナラティヴの間に位置し、アフリカ系アメリカ文学の初期の歴史をたどる上でも貴重な作品である。

とりわけ、オラウダ・イクイアーノはメソジストの奴隷貿易廃止運動に積極的に参画し、そのナラティヴは活動の一環として出版された。18 世紀スレイヴ・ナラティヴの中でも、9 版を重ねるベストセラーとなったイクイアーノのナラティヴは、メソジストのアポリシヨニスト活動において最も重要な出版物の一つとなる。本稿の冒頭で述べたように、イクイアーノのナラティヴには自身の魂の遍歴を記した、回心体験のチャプターが含まれている。イクイアーノは神学的にはカルヴァン主義的傾向を強く持つメソジストであるが、ウェスレー系メソジストにより推進された奴隷貿易廃止運動に積極的に参画する。

これまで検証してきたように、メソジストの宣教や社会改良運動は、ブラック・アトランティックにおける初期の文芸活動と緊密に連携していたのである。

終わりに

本稿は、18 世紀アメリカにおけるプロテスタントの環大西洋ネットワーク形成と宣教活動に注目した。最後に、要点をまとめた。第一に、18 世紀北アメリカやカリブ海植民地における宣教は、プロテスタント主流とはいえモラヴィア派を含め様々なグループが到来し、多様性が特徴であった。ヨーロッパには収まりきれないプロテスタン

トの改革エネルギーが、積極的な宣教活動を通じて新大陸に移入された。第二に、エドワーズとホイットフィールドはリバイバルに関して、ある程度共有見解を確認しあい、おそらく極端な熱狂主義を懸念し、リバイバルを批判するハーヴァード大学やボストンの正統主義の牧師たちへの対応において協力したと思われる。二人はカルヴァン主義的立場の強調で一致し、ミンケマの主張するように、次世代に継承される福音主義的コンセンサスを培っていったのであろう。独立革命直前、アメリカ植民地で起きた信仰復興運動はこの二人の正統主義牧師の働きにより極端な熱狂主義を制御する方向を取ることになった。覚醒運動におけるエドワーズの目的は、特に若者たちを、回心に根ざした聖書の倫理に基づく生き方へと導くことであつた。家庭生活を重んじる福音主義的な特徴がエドワーズの教会改革には含まれていた。ホイットフィールドとはこの点において、教派を超えた共有認識を築いていったと思われる。

第三に、人種と18世紀キリスト教について検証した。ヨーロッパ系によるアフリカ系やインディアンへの宣教は、一概に支配者側の宗教思想の押し付けと解釈できない場合もある。ヤン・フスの教えを継承したスラヴ系難民であるモラヴィア派の例に見られるように、宣教側のヨーロッパ系白人自体が、底辺を生き抜いた流浪体験を持つ場合もあつた。正統主義への反動勢力ともなる抑圧された側の信仰体験は、奴隷とされたアフリカ系の宗教的感情とも親和性を持ったと思われる。こうした信仰は、アフリカ系やインディアンの宗教的感情に共鳴し、政治的なエンパワメントに結びつけていく方法を示唆したと判断する研究者もいることが確認できた。

19世紀になると、一部のカルヴァン主義的なグループは、特に南部アメリカにおいて奴隷制を擁護する聖書解釈を確立する。18世紀の時点でも、エドワーズ、ホイットフィールド、フレリングハイゼン等、カルヴァン主義的傾向の強い宗教指導者は奴隷保有者で、個人の自由意志を重視するアルミニウス主義のジョン・ウェスレーは、早期に奴隷制の悪を糾弾した。ウェスレー系メソジストは、政治的活動を展開させ、英国の奴隷貿易廃止運動において大きな役割を果たす。²⁸ 覚醒運動が育成したメソジストの出版活動は、多様な執筆者に著作を発表する機会を与え、アフリカ系文学活動の開始もリバイバルと密接な関連を持つ。

エドワーズとホイットフィールドという二人の指導者を中心に、初期アメリカのプロテスタンティズムは多様性の中から福音主義コンセ

ンサスを見出し、やがてこれがイエール大学やプリンストン大学を中心とする改革主義系プロテスタントの牧師教育機関において建国期アメリカの正統主義となる。しかしながら、独立革命後のアメリカでは移民増加に伴い、ジョン・バトラーが主張するように「スピリチュアル・ホットハウス」状況は継続する。アンテベラム期の第二次大覚醒運動は、西部開拓地を舞台とし、さらに熱狂主義的なグループを誕生させ、福音主義コンセンサスは、また新たに探られていくことになるのである。

* 本稿は2017年6月4日早稲田大学で開催された第51回アメリカ学会年次大会部会E「環大西洋の思想・宗教・歴史」における口頭発表「第一次大覚醒と環大西洋福音主義文化の醸成—ピューリタン、敬虔派の交流を中心に」（“The First Great Awakening and the Emergence of Transatlantic Evangelical Culture: The Connection between Puritanism and Pietism”）を論文にまとめたものである。

Notes

1. David Hempton, *The Church in the Long Eighteenth Century* (London: I.B. Tauris, 2011), xv.
2. Olaudah Equiano, “The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano, or Gustavus Vassa, the African. Written by Himself,” in *Olaudah Equiano: The Interesting Narrative and Other Writings*, ed. Vincent Carretta (New York: Penguin Books, 2013), 178. 本稿における訳文は拙訳。全訳は久野陽一（訳）『アフリカ人、イクイアノの生涯の興味深い物語』（研究社、2012年）参照のこと。
3. *Ibid.*, 193.
4. エドワーズの回心体験記録は、次の通り。Jonathan Edwards, “Personal Narrative,” in *The Works of Jonathan Edwards*, volume 16, *Letters and Personal Writings*, ed. George S. Claghorn (New Haven: Yale University Press, 1998), 790-804. 1738年5月24日のジョン・ウェスレーの回心体験記録は次を参照のこと。 *The Journal of the Rev. John Wesley, A.M.*, volume 1, ed. Nehemiah Curnock (London: The Epworth Press, 1938), 465-77.
5. 佐藤敏夫編『玉川大学版世界教育宝典（キリスト教教育編）——シュペーナー、トレルチ、ブルナー他』第1章、プロテスタント正統主義神学（玉川大学出版部、1969年）、5頁。
6. デイヴィッド・ヘンプトンは、1530年代パリ大学で開始し、1540年ローマ法皇パウル3世の認可を得たイエズス会をプロテスタントに先行する「心の宗教」の推進母体とみなす。プロテスタントでは、18世紀ヨーロッパの敬虔主義と環大西洋福音主義リバイバル、聖書翻訳、そして自発結社の勃興が教派や教会を超えた「心の宗教」の推進を促した。Hempton, *The Church in the Long Eighteenth Century*, 36-45.
7. Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concept and Contours* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2005), 2.
8. Carter Lindberg, ed., *The Pietist Theologians: An Introduction to Theology in the Seventeenth and Eighteenth Centuries* (Oxford: Blackwell, 2005), 84-85.
9. 拙著『植民地時代アメリカの宗教思想——ピューリタニズムと大西洋世界』（上智大学出版、

The Emergence of Evangelical Culture in the 18th-century Atlantic World

- 2006年) 147-57頁、「コットン・マザーと『新しい敬虔』」参照。
10. Albert J. Raboteau, *Slave Religion: The "Invisible Institution" in the Antebellum South* (Oxford: Oxford University Press, 2004) 参照。
 11. Jon Sensbach, "‘Don’t Teach My Negroes to Be Pietists:’ Pietism and the Roots of the Black Protestant Church," in *Pietism in Germany and North America*, ed. Jonathan Strom (Surrey, England: Ashgate, 2009), 184.
 12. John F. Sensbach, *Rebecca’s Revival: Creating Black Christianity in the Atlantic World* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005) 参照。レベッカは1732年頃モラヴィア派宣教師のマーティンと出会い、回心する(45-47)。ツインツェンドルフ卿は1731年、コペンハーゲンでクリスチャン4世戴冠式に出席した際、セント・トーマス島出身の元奴隷に出会う。これをきっかけとし、1732年、デイヴィッド・ニッチマン(David Nitschmann, 1676-1758)とレオンハルド・ドーバー(Leonhard Dober, 1706-1766)が最初の宣教師としてヘルンフォートからセント・トーマス島に派遣された(49)。
 13. 1740年12月24日付のウェスレー宛て書簡。 *Whitfield’s Journals*, 587.
 14. Geordan Hammond, "Whitfield, Wesley, and Revival Leadership," in *Georg Whitefield: Life, Context, and Legacy*, ed. Hammond and Ceri Jones (Oxford: Oxford University Press, 2016), 111. ハモンドは、ホイットフィールドが1739年にカルヴァン主義について学んだ書簡として次の神学書をあげている。Daniel Neal, *The History of the Puritans* (4 vols; 1732-8), John Guyse, *A Practical Exposition of the Four Evangelists* (1739), Philip Doddridge, *Family Exposition* (vol. 1; 1739). さらにルターやカルヴァン、宗教改革について学んだとする。
 15. John Wesley, *The Journal of the Rev. John Wesley*, vol. 1, 142-43. 1736年1月25日の記録。
 16. *Ibid.*, 476.
 17. John Butler, *Awash in a Sea of Faith: Christianizing the American People* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1990), 2.
 18. ニューイングランド会衆派における熱狂主義批判の代表的著作は、Charles Chauncey, *Seasonable Thoughts on the State of Religion in New England* (1774). 拙著『植民地時代アメリカの宗教思想』第九章「啓蒙主義と大覚醒運動」を参照のこと。
 19. Jonathan Edwards, "A Faithful Narrative," in *The Great Awakening*, ed. C. C. Goen (New Haven: Yale University Press, 1972), 150.
 20. Benjamin Franklin, *The Autobiography: A Norton Critical Edition*, ed. Joyce E. Chaplin (New York: Norton, 2012).
 21. *George Whitefield’s Journals* (Edinburgh: The Banner of Truth Trust, 1998), 360.
 22. Franklin, *Autobiography*, 102.
 23. *Whitefield’s Journals*, 477. 10月19日、日曜日の記録。
 24. Kenneth P. Minkema, "Whitefield, Jonathan Edwards, and Revival," in *Georg Whitefield: Life, Context, and Legacy*, ed. Hammond and Jones (Oxford: Oxford University Press, 2016), 131.
 25. Phillis Wheatley, "On the Death of the Rev. Mr. George Whitefield, 1770," in *The Norton Anthology of American Literature*, shorter seventh edition, ed. Nina Baym (New York: Norton, 2008), 422.
 26. Vincent Carretta, *Phillis Wheatley: Biography of a Genius in Bondage* (Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 2011), 34.
 27. 献呈文は次の通り。"To the Right Honourable the Countess of Huntingdon, This Narrative of My Life, And of God’s Wonderful Dealings with Me, Is, Most Humbly Dedicated by Her Ladyship’s Most Obligated

- and Obedient Servant, James Albert” (James Albert Ukawsaw, *A Narrative*, 1772).
28. John Wesley, *Thoughts upon Slavery*, 1773.